

# 末黒野

すぐろの

5月号 (通巻825号)



# 桑の箸

小川玉泉

風花や税申告の列につく  
日の丸へあまねき日差建国日  
照り焼きの鱈ほぐしぬ桑の箸  
バレンタイン孫手作りのチョコ届く

ゆつくりと軒樋伝ひ春の雨  
山際の白梅汐日捉へをり  
冴返る本堂姉の大練忌  
独楽ひさぐ店先掠め初つばめ  
引き潮の中州に競ひ蘆の角  
土筆摘む鉄橋をゆく三両車  
鶯の声や小石に躓きぬ  
首痛くなるまで仰ぐ辛夷の芽

# 梅ひらく

松本三千夫

竹林の道幅二尺冴返る  
夕鐘の余韻に籠る余寒かな  
建国日ひときは光る根無し雲  
春灯や何か言ひたげなるこけし  
梅二月十二日、山下二海先生六回忌東風や寺門クルスの紋掲げ  
一樹のみ満開の梅一海師忌  
下萌や鳶の高鳴く蜚の道  
家ごとに小さき橋掛け梅の里  
春寒し海ひとところ日の当り  
春禽に出入自由や基地の空  
稲荷社の鳥居百千山笑ふ  
流れ藻を置いてけぼりや春の潮

# 甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）

## 白梅

大橋伊佐子

蒼空に透くほど淡き春の月  
白梅の青き暮色となりにけり  
煮大根味沁みつくし寒明くる  
庭に来る二羽の山鳩春隣  
春泥に夫の手を借る春の夢  
初午や小さくなりし願ひごと  
立春や星やはらかくうるみをり  
日脚伸ぶ行き交ふ人の声弾み  
鷺歩む浅瀬の水も温みけり  
爛爛と満天の星冴返る

## 深雪晴

黒滝 志麻子

白鳥の留まる影のやはらかし  
雪吊の朝の日に映ゆ幾何模様  
蠟梅や古民家に干す紺紺  
寒芹の手に残りたる香りかな  
山越しの風が耳削ぐ寒の月  
奥能登の山河声なき深雪晴  
朝市の山風重き寒九かな  
鳥一羽梢にひかり春隣  
梵鐘のひびく集落春立てり  
露の芽にふるる津軽の風かたし



# 畦 焼

田中臥石

雁渡る空透明に岬端  
舌の上の春の苺の甘きかな  
原稿の枿目飛ぶ字や春の夜  
鳥雲に入るや岬の海日和  
推敲の朱筆の走る余寒かな  
本屋出づ春の霰に傘持たず  
春光の蕘や日蓮誕生寺  
白梅のひかりや犇と風の音  
畦焼の声を掛け合ふ井堰口  
畦道に火事の始末の消防車

# 晩 冬

松田泰子

水仙の花の高さの風匂ふ  
重たげに身を揺すりけり実南天  
枯れてゆくものにも残る光あり  
死と向ふ本を読みをりちやんちやんこ  
雲払ふ気配も見せず眠る山  
冬紅葉くぐりて落つる水の音  
雲ひとつ行方忘れて冬日和  
安曇野のつる夜風や干菜風呂  
本降りや待ちぬし春の雨なれど  
梅匂ふまで青空の下りて来し

# 乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）



寒 日 和

菅野日出子

白波の鞆すなぎさや磯干鳥  
寒風や砂に埋れし捨小舟  
浜駈くる赤毛の馬や寒日和  
房総を指呼に三浦の懸大根  
下仁田の葱のあまさや舌焼いて  
分譲の立札の丘落の臺  
街灯の切れて久しや空つ風

寒 明 く

堺 昌子

照り翳る山の氣息や冬桜  
雨戸繰る黙を深むる雪の音  
通し土間の奥の裏山春隣  
ふり返る橋のたもとの冬桜  
春隣厚手の和紙に折る羊  
南向く窓より風を四温晴  
しののめの空より寒の明けにけり

日脚伸ぶ

中野久雄

探梅や野末に仰ぐ昼の月  
日を溜めて臘梅匂ふ大藁屋  
野阜に残る夕日や日脚伸ぶ  
居酒屋の他は仕舞ひし寒夜かな  
突堤の釣竿撓ふ春隣  
山裾に煙一筋春立ちぬ  
川底の魚影うごめく浅き春

星凍つる 西川みほ

峡泊り 吉田きみえ

日の移る窓の凍蝶みじろがず  
早世の弟の忌や星凍つる  
冬耕の村ふところに磨崖仏  
湖畔道一禽<sup>たけ</sup>啼る雪解風  
笹鳴を礁へ落す崎の端<sup>はな</sup>  
寒風やかもめの群るる舟だまり  
過る影覗く影受く寒牡丹

氷柱 森清 堯

臘梅や寺苑の風のやはらかに  
日をまとふ冬鷺堰をみじろがず  
水鳥の水脈に群がり巨船出づ  
円陣を解く野球児ら息白し  
氷柱溶く光の束をほどくごと  
立春の日の出にひたり露天の湯  
泡ひとつ残して甕の薄氷

水替へて水仙匂ふ仏間かな  
枯蓮や水脈を残して番鳥  
寒最中海に一つの手漕ぎ舟  
まるまると冬大根の無人売り  
寒明けの梢に光り一つ星  
梅園を出でて子等との峡泊り  
梅ひらくかつて夫との径なる

冬牡丹 石黒興平

鮫鱗や口上長き吊し切り  
風紋に轍ふたすぢ懸大根  
安房からの風をまともに懸大根  
三日はや書齋がはりの喫茶店  
寒牡丹緋色尽して菰ごもり  
着せ藁のやや前かがみ冬牡丹  
鳴弦の儀に鎮もりぬ鬼やらひ



# 青炎集

## 小川玉泉選



横浜 原 和 三

横浜 上月 智子

弾初の洩るる小路や神楽坂  
碧天へ放水の虹出初式

**青竹の弾くる高音大んど**

寒林のしじま深むる足音かな  
車座に草履編む園日脚神ぶ  
雨あとの木木の艶めき春隣

横浜 岡本ヨシエ

横浜 河合とき

古民家の裏の竹叢笹子鳴く

**臘梅の香に歩をかへす里日和**

呼び交はす畦の母と子若菜摘  
鳩に餌を与ふる媪日脚伸ぶ  
福豆の頬に当りぬ神の庭  
西南を向き節分の恵方巻

**風呂敷の形は酒液年始客**

小晦日路地に八匹鯛焼かれ  
手作りのややいびつなる鏡餅  
たぢろがぬ釣師の背中どんど爆す  
寒椿据り宜しき志野徳利  
朱の著き巫女の伊達襟春の雪

縁側の猫も見てをり牡丹雪

切干に日向の匂ひ夕支度  
炊きたての飯つややかや寒玉子  
浅草に芝居観たる夜根深汁  
**小匙もて煮凝りすくひ御積りに**  
船笛の枕に届く霜夜かな

横浜 川村 亘子

潮風の運ぶ浪音春近し

**逆上り出来たと泣く児春立ちぬ**

春めくや行く白雲に光満ち

獺に会うてもみたし今日雨水

薄霞真白きままに今朝の富士

暖かや抱く小犬の日の匂ひ

横浜 三橋 玲子

**生きいきと大地の息や霜柱**

ひとりしてまこと至福のひなたぼこ

置なはる嶺嶺の清しや春立ちぬ

捨て粗朶にほつと芽立ちのふたつ三つ

人住まぬ生家の庭の路のたう

全快の友はれやかに麦を踏む

新宿 稲垣 佳子

寒椿一枝厨のあらたまる

天敵に陣たて直す鴨の群

浜風に焰の反りやどんど焼

**てつぺんのだるまへ遂にどんどの火**

早咲きの白梅の香や女坂

林泉の水辺の小鷺春立てり

横浜 榊山 智恵

霜解けの光を止め苔の青

浮舟のかすかな揺れや寒牡丹

臘梅や頬刺す風の匂ひ立ち

**冬うらら烏天狗の行者顔**

寒念仏小町通りを横切りぬ

鎌倉の寺苑巡りぬ福寿草

横浜 斉藤 マキ子

水底の色となりたる落葉かな

**餅搗きて繋がる地縁ビルの街**

待春や彩整はぬ花時計

春近し牛舎に餌をきざむ音

針供養いまも丈夫な糸切歯

天を突く曙杉の芽立ちかな

横浜 波多野 孝枝

冬日透くステンドグラス葡萄の絵

車庫入れの音に目覚めぬ小夜時雨

着ぶくれて渋谷の駅の変はりやう

寒満月閉むるに惜しき木の雨戸

**瘦せし身に子より贈らる羽根蒲団**

亡き友の跡地は四角寒の雨

# 耕 土 集

松本三千夫選



雲流る寒夕焼を映しつつ

肉まんのてつぺんの皺雪催ひ

俯瞰すやライトアップの雪まつり

まだ箱にある待春のベビー靴

如月の土に滲み入る久の雨

柏 湊田 則子

音を消し色を消しつつ雪の降る

うづくまる人を尻目に冬の鯉

陽光の音沙汰無しや梅一輪

受験子の合格告げてついと去る

人寄する梅一本の華やぎぬ

横浜 今野 明子

六尺の雪の故郷に降り立ちぬ

雪の田や電柱の影長々と

冬木の芽米つぶほどの光かな

きのふまで立ちてをりたり雪だるま

浅草に新しき海苔買ひにけり

新 潟 太田チエ子

横風のすさぶ尾根道初不動

新聞のインクの匂ひ日向ぼこ

満天星の赤き芽尖る垣根かな

山裾の川風やさし猫柳

白梅の際立つ夕べ柚の家

東小藺美千代

侘助の落ち行く先や潦

片足を畳み直してみやこ鳥

薄氷を突いて厚さ確かむる

せせらぎに合はせて戦ぐ猫柳

春兆す青墨の書の凜として

相模原 内田 梢

着膨れの幼の笑顔乳母車

メール打ち右手袋を落としたり

あけぼのの朱色地平に春浅し

ふらここを漕ぐ児の足の宇宙蹴る

日日瘦する白き月浮く春の空

町田 伴 秋草